

その他

船舶通信兵日記

東京都 岡庭 廣次

私は大正十一（一九二二）年二月十五日、東京浅草に生まれました。父倉治はそこで建築を業としていました。近所は、靴の製造、販売、花川戸では皮のなめし、そして今戸焼で知られた焼物工場がありました。

私が出征する前まではそれほど空襲にあわず、まだ下町の面影を残しておりました。

男五人、女五人の十人兄弟で、男は五人の中三人、女は一人子供の時に亡くなり、十人の中、四

人死亡して六人だけが成人になりました。

子だくさんの時代とは言え、戦時下の食糧難時代に子供を育てるのは大変なことだったと親の苦労が忍ばれます。

私は高等科を卒業するとカメラの製造、及び双眼鏡の仕上げを業とする店に丁稚奉公にできました。

今と異なり、カメラ製造の大会社はなく、町工場の乱立でした。私が勤めた喜光堂の親会社の三代目は鈴木金五郎の伴の秀男氏が継いで今でも立派に家業を継いでいます。

私は、昭和十九（一九四四）年八月十日、臨時召集により、船舶工兵第一聯隊補充隊に応召、同

日、船舶通信隊補充隊に転属、教育隊に編入されました。兵種は通信兵です。

昭和十九年十一月二十七日、第一中隊に編入になり中隊本部は三原市にありました。

同年十二月十五日、「船作命甲第三十四号」により特設海上輸送第十二大隊要員として船舶管理部服務を命じられました。

いよいよ内地と別れ、戦地へ赴くのです。日本の戦況、一段と苦しく、特に海上輸送は危険極まらない有様でした。

三原市の似島を出て、門司に集結し出航したのが昭和二十年二月十八日でした。

輸送船団は船舶五十隻余で編成されていました。大隊の編成は五個中隊で、一個中隊は六個小隊でした。一個小隊は一〇〇人位ですから、三〇〇人以上の大部隊です。

かつての堂々の輸送船団の雄姿はなく、漁船、帆前船、機帆船を寄せ集めたもので、吃水、数メートルです。敵の魚雷は船底を潜ってしまうの

で敵の潜水艦の目標にもならなかったそうです。

何が幸いするかわからないもので、潜水艦の襲撃にも遭わず、無事、目的地につきました。そのかわり対空監視、対空防禦の方もお粗末なもので、各船に高射砲一門、重機関銃一丁という具合でした。

門司を出てから壱岐・対馬へ寄りました。ちょうど、玄界灘で台風にあい、全員、半死半生でした。私もその後の時化は何とか乗り切りましたが、第一回の大時化は今思い出してもぞおーっとします。

船団の都合か、作戦への対応か、木甫附近に二カ月近く駐屯し、山東省の青島に到着したのが四月三日です。

申し遅れましたが、船舶工兵隊とか、船舶輸送隊とかは全国的な規模で兵隊を召集するので郷土意識は零です。三〇〇〇人の通信兵の中、浅草出身は僅か三人です。中隊でも小隊でも同じで、

ゆっくりお国自慢するなんてことはありません。従つて戦後、戦友会とか合同慰霊祭とか一回もやっておりますし、手紙のやりとりもありません。

昭和二十年以降の出征兵士は竹槍と、竹筒の水筒で武装と言つておりましたが、何とか三八式歩兵銃は支給になりました。

青島を五月二十六日に出帆し、上海に着いたのが五月三十一日です。その昭和島という所に駐在し、衛兵と警備と輸送の一端を荷ないました。満足な初年兵教育も受けない兵が、第一線の任務につくのだから大きな不安がありました。

陣地戦も夜襲もなく、また空爆にも遭いませんでした。日本国内の空襲と、中国一の都市上海を爆撃するのは戦後の対策上、控えたのかと思われませんが、はっきりわかりません。

七月二十日、上海を出発、二十一日南京着、附近の警備につき、八月に入つてから本部付になり

ました。

八月に入ると急ピッチで時勢が変化を告げました。

八月十四日 終戦詔書発令

八月十五日 復員下令

九月 二日 停戦協定締結

十五年戦争も日本がポツダム宣言を受諾し、無条件降伏することにより終止符を打つたのでした。

九月二日から翌年の三月まで抑留生活を余儀なくされました。三月十五日に博多港に引き揚げ、同日付で召集解除になりました。

予備役陸軍上等兵に任ぜられ、善行証も付與されました。

短期間とは言え、中国の第一線で、歩哨、警備、巡察と苦勞し、夢想もしなかつた抑留生活で想像を絶した心勞をなめました。

江蘇省の蘇州というところに抑留されていたの

ですが、第一の苦労は、食糧の絶対量の不足です。粥食一食分で一日を過ごさなければならず、労働の下請け、農家の手伝い等、喰い伸ばしに必死でした。

つぎに良民がときたま暴走族に化すことです。武器なき兵隊こそあわれです。黙って、取られるのを見るのみです。

やっと引揚げの日程がきまりホッとしました。上海―博多―東京へと帰国し、東京から家族の疎開先の前橋まで探し求め、涙の対面です。しばらくして東京の焼跡へ立ち戻り、掘立小屋を建て、見よう見真似で靴の修理を始めました。

一年ほど経ち原料の仕入れも分かり始めたので個人靴の注文販売を始めました。婦人靴の、特にダンス靴の販売が当たりホッとしました。

カメラは材料不足でしばらくは手も足も出ませんでした。

落ち着いてから結婚し、現在、一男二女に恵ま

れ、それぞれ世帯を持ち元気で生活しております。

冒頭、申し上げたように郷土部隊でなかったため、戦友会は結成できず、開催もなく淋しく思う日もあります。

二度と戦争の無いように家族ともども語りあっています。

戦争と自分

過ぎた時間は二度と来ない(一)

佐賀県 中島 富夫

私は、陶器市で有名な佐賀県有田町で、陶器製造をしている家に生まれ、昭和十一(一九三六)年六月十日、小学校五年生の時「時の記念日」の標語の募集があり『過ぎた時間は二度と来ない』と題して応募、佐賀県教育委員会より表彰を受けた。